



中村俊定文庫
文庫 18
77
2



延宝二

小方元た集

維舟撰

(三)



()

人をたにいさめし我も似いくつ
 こくねちの酒常夏のはふ
 暗の哥よも山を胸に棄し入て
 櫓ををし出る月の舟のり
 鳳の巻ふりさけこれハ腹カ後斑
 ちかれくの雲雫の空
 岑つゝき嵐ハふけ共松ハ四季
 巢にふすひなをせだつるかいの

レニナ

何橋 介五

維舟



()

垣根にて眠催す猫ひたひ
 嵐あすすもいさ道となり
 月花のあり袖いまた心存し
 先御紫をあへる え三
 二
 大師から春は好ある松の札
 鬼住門はよきて屋づくり
 生ゆくをいひ合たる肉とに
 肩こす髪は君のはからひ
 下さるゝ伽羅の身に焼袖にたす
 かまへてまこる糸の棧いす

何よりも緋の窟ニを寝しけれ
 木を切くへてたく火いお為
 終夜思ふ虎口の陣屋形
 名残おしきのさかつオの酌
 感ふてふうか水めもとの汐漏て
 ひんのさがりは海老房の如
 うつくしや紅すそごの衣の色
 はやり事として欠れは豆粒
 折からもめぐり来にけり風車
 立伎の葵日に真むぎなり

おほとかにうゑ給ふこをめでたけり
 かき茂の神祕は有難かりき
 空山のたゝかひ領て利を得たり
 遊女のおねは餘念浪風
 琴の言にゑるこゝろ、我れんほ
 化粧言葉を 川鳥のさと
 やはるかお砂地の妙きひさし
 まひハ此袖にひくお 秋風
 置やうす庵ちんかういとおひ
 月の暮合まで小芝居の舞舞

神酒の錫土器取て打向ひ
 機嫌うかふ一首のなかめ
 岩木こいあふ赤な今いたゝ
 思ひ絶えあむいのち様足る
 取めしき夢物法仕出して
 中にひそくハなさりさあふ
 早舟にたのもし人の月に日に
 ひんきに宇流のけおを紅葉を
 やゝ寒くあげくひをして擣衣
 暮の手ひとふたえをこふひのこ
 三十一
 三十一

起たり憂たりいのよもとろよ
 樹にのほり鳥はなやかにかにうたひ出
 三三
 朝霜は廿戸屋茶舟も真白に
 あなたにいりけり蟹ハ寒やえ
 足ふちたらしく難波津の橋
 行幸のかいりためしハ又いつか
 号服の縫を織部のつかさ
 一夏の旗は仰にしたかひて
 都へつがと丹波路の月
 三三
 三三
 三三

白蝶も黄蝶も花にあつはれ
 宿のうくひす春を呼なり
 三
 水のなれれもはやけ詩の作
 しはうくハ耳をあきうま詠詠の槍
 胡馬に乗ゆく旅はいとを
 北風の傳へもかきな文こは
 あわ事泣のなえ瓦の晴雨
 交くに向しは下午のうらめしや
 熟柿にあうて忘れの中
 10
 20
 新宿 甲州屋特製

名頼ふこは後の世かきて 涅槃像
 修行の印をつみし 西行
 仮の舎りおしむい心のたゝ事
 物足の場の絵おしるの上
 年當もひらかぬ 開く葎かりに
 嵯城の川瀬も流し 冬 鮎
 なかめをる月の程のなにかしら
 肌ほめかて 涼しあ たひら
 手に取こあかしす 物い蟬のはね
 たつる戸さしのくるゝ落せり

帯を又しゐる小腰にいたきつき
 指ならせとてゆつれる刀
 拍子あひ踊のみりも一様に
 石すく月の明て 其まゝ
 碓もわさくさか木や今年米
 菊見の念の秋い来にけり
 短尺の和歌吹上も長なからに
 枕をたてて 風鈴をそまきく
 花や散 東しうみの軒の意
 二月の雪のちりりくくと

下屋敷花の浪立片岸に
表のうつほの天蛙とぶ

三十一ウ

長枕忍寐扱もめつらしや
死なば死な人のあた言まめ言
思ふかうつめるとを^起し水形人
せのわが為の武士の奉公
祈るとて弓とやいたの捧物
石波山^起越し遠足の時
下り坂も朋る、雪か白鬼
のかさしと追雉の表さ
治る北乱をも知国まはり
川筋川筋柳の系すち

三十一ウ

う
 乱ぬる國の宇こそあやしけれ
 銚も異るかたなのやいは
 詠て左へおれる君ほし着に
 此一鞠はよがよ夕かせ
 鎌倉の雨晴やかにさすて
 海老のこくとくに腰のさぬ人
 鎖あろすかたへのうひらあけさせて
 五奈木たりにたてし見車
 橋の上練は誰子そ神祭
 鍋のしりへをこかす葛餅

麦何ぞ云
 秋雪や卒尔に見せぬ富士の雪
 くめは月をももち^地汐の白籠
 荒海のいかゆる鮎釣上て
 作る思業はさかつきの前
 涼しきや夏を棟門高き家
 雲間の曇いなこい
 舟便直絶て程ふる五月雨に
 米も薪もとし江の村
 維舟

水ミヅの鯨クジラと白鷺シロサギありて
 大御オホミコ田タのううるほふ雨アメのあし言ことばに
 醍醐タケカネの能のうを瑞ミツ離リ窟ツツし
 ことふすの九月クニノナナと暮ヨる月ツキ夜ヨ影カゲ
 栗クリはハ雁ガシもかしつつまま草クサよ
 よくそたつ山の太木オホキのいか計ケ
 熊野クマノや伊勢イセの沖ナギサに日表ヒノシ
 鯨クジラかと海ウミ也ナリやうる、ゆび指ササて
 船フネにノいたるやつりがねの巻マキ
 もてなせる酒サケあつ物モノも喜ヨロコの為ため
 新編シンペン

風カゼはハ燈トウ香カウや先マ足タた水ミヅ髪カミ
 面オモかけにニ立タし小袖コタマを取トらうし
 寝肌ネムわかれレ 猫ネコううめししき
 つらねね哥カ床トコ脚タラシ思オモふ朝アサほほううけ
 粥カはハやマまミの命イノチなりナリけり
 二ニ人心ココロ長閑ナギにニ那須ナグサの石イシわわりりて
 説ツツ禪ゼン法ポフはハかかすす共トモななき
 尺八シツパチはハつつふふいたいたまま、花ハナををここえ
 古コををふふつつりりとと捨スツしし露ツルのの身ミ
 淋シししささもも苦クににせせぬぬ月ツキのの芳ヨシ野ノ山ヤマ
 新編シンペン

10
 20
 新編 甲州屋特製

花をたて珠教くり言せ老のくせ
 よた小眠も永日あたり
 意に飛鷹とちの文をひらす
 化粧はよめの朝起の部屋
 餘る迄伊達のうすもの緩のきぬ
 雪をめぐらす舞のいくさし
 限あき午満を祝ふ酒宴して
 御夢想同じ御簾の内
 まうし子の行末をくたのせしや
 金剛山にこもる楠の木

墨染の鴉はないて阿の林
 とやせんぬくやあかぬ中宿
 すへ絵ふを人の物いひ宇流の星
 灸やけぬらん肉宛あたり
 かひくしぬさ取あへず旅ありき
 御幸の供奉は紅葉の時節
 小倉山よ今の春草心せよ
 露に時雨にすへるかけはし
 柱とも頼て杖を月の暮
 厨子も嬉しき弥陀の末迎

對めしてむかし忘ぬ都人
 たかひに祈る 初瀬の利生
 うかづける心の村もかゝ直り
 こぶしもつよき弓にこそあれ
 番へるいいともしこき御相撲
 悉駄太子も露の古かたり
 月影も象生瀧の難波寺
 其役まをとのふるかく
 金銀の花ちりばめし舟の内
 之にしに心筑け糸路の春

岩陰は冬の向に合屏風にて
 なか水たつるを根く江の舟
 水人ほし水浪の緒すけえ引琴柱
 宿は明石の園辺の鼓景
 人丸の其言種は月日に
 あすめは親をみ路も忘す
 夢見んと紅葉夜をうら返し
 来ぬ夜の恨むねにあく水へ
 甘雨もふりそゝのかせ都公
 かぐたちははは白果の思出

三才

袴をまひとくならずより道服も
 あしたの穿きわくる奉公
 うつら狩領てすはた月の秋
 野へ身にしみて尾花りうたん
しん
 たのしみハ其中に有重者
 うたへや旅の打ちけの袖
 假初の忍かほえ子にも心を惑ひ
 春日のさよになまめけりふり
 数くの轂を市前に備置
 釜のふたいひ湯を参らする

恋中へにあそハす笛ハかすあめや
 花のほとりへかよふよる
 竹の葉の酔をすゝむる寝様にも
 鴨の神理を霜芝寒し
 老ぬれは心かよはくやせほそり
 さらぬわか水の一首のあけ水
 かた足こを今ハあたな水んのかこ
 夢にうつしに中將の事
 七わたの玉ぬくいと、ち之を磨
 巾着といふものはいつから

月もさます尺八煩惱の眠哉
 はつたと法をわする、新酒
 旅の道紅葉の秋の苦にならて
 聲の花めで鷹をうらやむ
 石亀はおなし所に岩隠
 葎の藪のミ池の日あたり
 枝も葉も一ふりかはる松の木に
 春を迎ゆる西路地の指入

賑へる花着君の誕生に
 氏の栄も長き藤つる

おとこのくせや女にまどふ
 置錢の散く思ふ情ふり
 いとまよえ又あふさかの関
 音曲のをれかときけい酔泣を
 何かいしかあ初鮫のすし
 二なしいあす中比の秋に馴て
 霧のる水の二布恥かし
 つきものいあやしき月の形人
 とへと答すぬしハ誰様
 聞えぬ了哥ハ翠の屋きい

さそふ水あれい硯を午習を
 うくひす起す朝の粧の枕
 移香の肌着かすまぬ別して
 二、ろほそくも柳のいとし
 鳥部山清水さして花車
 鉾はらふかの諸人のうそ
 あきなへる足上午めく市の場
 ほめくさは是芦荻の能
 賑ふ中糴調ふきのふ今日
 内裏に参る袖の薬玉

10
20

新
宿
甲
州
屋
特
製

見涼せハ名にし 懐の遊ひ者
 波のうねり 行かいつあり
 水葵夏の花にて夏もなし
 唐き唐敷にすねくまれ人
 念句こそ真を催す娘たれ
 今に貴けぬ波の権現
 しげ山の樹存を吹花足をも
 日もあはれかにひらく年當
 あまたあしたくみも春の隣をな
 夏をすあはれ佛の只地

明ぬれハ暮知なから文こは
 恋を泊瀬の山くいのる
 姫君に付したかへる筑紫人
 草かり笛のものかたりたを
 力得人十念さつけおほしませ
 すくに終を糸まふる時
 何くれの年とけり物ハ月もしれ
 富子門には誰人絶せぬ
 言へつらふも春るも聊おもほえす
 かれよこれよと色好あ也

三十八才

出舟のともなひ名残惜し泣
 罪は鬼界か嶋崎守了
 僧正の心の月も満汐に
 昆布の菜子でも忍ん女即花
 煎茶のたりと思へハ放生会
 老杖にもニ水鳩の岑
 今日の日暮色時なむあゝ陸
 かねをきくすり糧を行ふ
 旅立もいふ地上戸の夜をこめて
 尺の雪にも駒といふもの

三十九才

片岡の月に旅人たうれ伏
 秋の時雨にすべる山こえ
 三 榎の木に猿のこしおけをやらん
 春の戸迫きたぬきの鼓
 淋しさい勿論なれや素門
 うき事一雑こときかて娘しき
 指あたる虫の目付のいしれ
 殿風のふくたゝ足のおもて
 治水の時に扇の地下人も
 拍子をそろへうたふふしく

10 20 新宿甲州屋特製

名はねかひすあのみ鳥も我契契
 子たり向ひてつくは胡鬼の子
 長閑なる時をしろすはり敷
 詫言あもふ神の湯まつり
 有馬山勸請中三輪の櫓
 いてそよ猪足のき、をくまはや
 子ところも月うそ寒しあう枕
 小夜着の下の猫あまゝあき
 つれくを堪たる尼の住所
 在はうらめしと北嵯峨の奥

冬の梅えてやかたらんかくし妻
 小袖の伊達い水仙のはな
 住吉のうら珠しき寝めくり
 霧のひまこく淡路の舟士
 秋の空いつくへかよふ千鳥かけ
 遠山寺の月の夜談義
 彼岸にはもいや暑さも消せらし
 針仕事をやせんたくの衣
 たれこめてやましけれあき花の春
 あふ慈草ハ麓し足めよし

10
 20
 新宿甲州屋特製
 シリネウ

野上にて花とえしをい下心
かすえをそめてやるけさる文

丸ぬれに浪の筏木指集て
俄一雨さへ風のふきおり
忍ふにいと人の事も只ぬかすまし
夜毎にのどく築地の崩れ
庭鳥も狐も多き古社
札御被もうつほ木の陰
祝ひける春の隣の煤はきに
白界をひぬるハ衾の着着
人生とつけ有かたや眉根かき
恋を亂にたのこかけ帯

三十才

客は茶の案内を待中立に

露地に涼しき水打かいげ
 日は西にかたみきにけり石灯炉
 鳥井の笠木又さかり鯨
 帰さを三輪の楢針糸付て
 露いさゝかもつさぬむつ言
 紅の国の枕も長き夜に
 月も遊女もなくさ久の種
 友舟の罌手悲しく謡つれ
 浦にきやかに塩かまの景
 殿造とんてい倉をいさしらす

何紙 方八
 いかにかかへおれるさいしん木綿柿
 いちるも稚も唐庭の陰
 急ほしつけなかす夕鞠月に蹴て
 星の會圖は年に一たひ
 妻思ふ床の氣色やいらつ覽
 扇にやかて扇書のふで
 名所のいはれに感を催され
 諸白なれはむも貴観

10 20 新宿 甲州屋特製

舟かかむらせて江の葛まうて
 龍神も祈らば叶へ我頼ひ
 雨も詠哥も私あらし
 虎ふす野へもつれん大磯
 紅葉がさねの急りつき扱れ
 口そへて菊の盃思ひさし
 日あたりよしと紙をすく也
 黛は三か月なりにいつくしや
 まんまり川淀廣き山陰に
 龍神も祈らば叶へ我頼ひ
 雨も詠哥も私あらし
 虎ふす野へもつれん大磯
 紅葉がさねの急りつき扱れ
 口そへて菊の盃思ひさし
 日あたりよしと紙をすく也
 黛は三か月なりにいつくしや
 まんまり川淀廣き山陰に

雪踏の跡はいつら白雪
 花の根にさうハくと云もせて
 北向にける鷹は高飛て
 山復山磁石もありや雲霞
 春の暖気は水おまても
 あやしくも腹ふくる、や堅田鮎
 かくして文を足すしの、おく
 今こそあゆ昔ハ恋を葉門
 身ハ終る共かゝる荒行
 年毎は寒声つかふ橋の上
 あつ氷お鴨いづくがひ

10
 20
 新編甲州産物製

三
 暫は声に寐鳥のかくれなし
 所望の笛の一手之をいぬ
 かけをとりかなう秋の習をや
 駒もあかへていそく少將
 深草の月にも闇にもひたかよひ
 おもふをす—宇治の中宿
 河風ほよぎ了矣に戸さしして
 さくらをいけし脇息の前
 足よやく目もかすいぬる隠居し水
 佛まゝりといふもをえき日

着にハサハハへなたり急びよけん
 春のはしめをよろこひの礼
 脇能は花に出立春拍子
 長閑なる在の八隅繁昌
 立給ふ南泉堂は岸の上
 ちかひの網は池の小魚也
 佛法僧なりけい我等も菩提心
 風常樂と音信るやま
 春杉の茂りを月のくわりぬけ
 夜目あきらかに落ちたさひひ

一向に年も夜昼弥陰を耽之
 注連のけまくも八幡の利生
 二子りのつるきを思ふたな心
 眉間尺こそあやしかりけれ
 天冠のたて物走る舞の袖
 團の屋形を祝ひのまうけ
 合ぬる鷹のをくれす露を取
 千町の田もおやしふる池
 はへ山の下たりハ
 花の露
 去もいはほも青陽の陰

三五才

からゝあるわさびの根こそゆかしけれ
 先は出来たり鯉の羹酒
 夏をむねとたくむ座敷に招かれ
 はな橋の亮句あんする
 子規思出にせん耳果報
 猿も淋しき大はらの伽
 ひ之の山月や小野から見上じは
 うす肌寒き旅のころも手
 露の何に夕けの粟や急く鹽
 かんきんせはや草庵の内

10 20 新宿甲州屋特製

う
 御願せよ 乱る、 殊の糸 甘薄
 花もこぼる、 足も 秋の 露
 無影を 吊泣に うく 涙
 欠合あたに やぶれ 果つる
 穀も 輪も 古て 老方 七車
 白雨しきる 祇園 会の 鈴
 調し 絵ふ 瓜や 暑さを さますらん
 すゝめし 酔はつ おる、 はあう
 うゝハ 咄あて 心も はれ 物に
 行水して や月 与まつ へき

緯何 九九
 徒数奇の 千貫 道具 かけさの 雪
 冬こもり せぬ おめの 花筒
 陽にあく 春の日 あたり やはら きて
 地虫は 土の中を いて けり
 庭鳥の 足も かす まぬ 荃芥
 かさり わら まで 村の にき はひ
 芝月を 得了 江の水 の 舟 揺
 網の 目 染した まる 秋風
 維子

あふ夜半ハ長かれとのみ袖香炉

露もわすれすかたる山

あふ時は爰岩の初花比良横川

めくり見の清水のはる

午習を墨する日請温に

物のけしきもなをるよそほひ

難面も命ばかりにもてなして

小遣用にささせたまかね

唄てのほらんといふ田舎かけ

なかれはよもや會津唄燭

三十五ウ

10 20 新宿甲州屋特製

いろりぎハ濃茶しの子の里の長

葉ははらりと寒き木からし

雪花も月ハ冬こそ夕なかめ

さすらふる身ハ清足とまりが

京はうしと東の方一人二人

仕合いかに世とわたるわが

いやしきも其縁ぐいハ有なひ

おとこのさぬをはりやりてけり

もてあそびひなとて早く時急

鳥も巣たゝん花けちよほ

三十六ウ

紅梅に勅の有ニそかしニけれ
 あるしまろけやいり酒の鯉
 淀川の景をかへし夏夜敷
 所わしく思ふ水のみにり子
 伴ふか中に瓶をい打わけて
 夜尸手向つる是の草花
 月はとく入打基にけり遠も
 傳さるゝ袖の露の丸おし
 命後子ニ交に忘ぬまの物思ひ
 恋をろけすは何多笑の神一

10
20
新宿 甲州屋 特製

鍋かつく茶見せはや杓子息
 鬼見をもあり夏の相摸場
 三 む孫共涼めと招く祖父方
 哥はもつとも題にしたかふ
 鷹の島百の石くわきまへて
 雪に入部郡に豊平の砂浜
 氷る年北今幾日有て杓相子
 かねかすむたり門跡の臺
 しく物ハ并のおかし春の月
 山形ありまといひかへる鷹

三六ウ

黙もおとろかす人き琴の曲

市法といつは目前の事

一筋にあたらん為の橋すゝめ

酒を過せる三たりの笑ひ

博奕の益あす道にかいつらひ

片こゝろにはわすれぬ遊女

三ッ 記念こそあななる文の地し書

ゆくかしは崎さき／＼狂ふ

舟人も聲を帆に上る凡おもて

うら悲しげに聞千鳥のけ

三七才

草鞋のをくわて足やりのあらん

まん志ようそれいこもる市井の野

柿木がこゝろしうるゝ後々も

さがり葎まゝ庭の夫石

嶋好に給ふに走る水の中

波の月さへあはしくうさき

天津空鹿の上毛も星いくつ

霧 雨けれと希表ほす篙

明日よりハ花乞にゆらん養子妹

園是め志望の春の古さと

三七才

名浦風の心ち長閑にありて

小貝も砂にまみれて拾ふ

汐の子よ幾るを足すも母の憂

盃事よよぶ月のもと

大いなるもつこの庵を狩りし

寺いとま旅の殿風秋風

ふたいかい今い階まじつ（世也）井

一命をうと日來のなすけ

堀しさを母夜に包せん先手役

こはは武龍の風の徳心

果もなすり野にハいかなる風の神

雲山出果ん真黒なそら

高札の陰に蒼蒼むいゆ花か

ほといすすきく寺ハ極果

う佛とて大なる伽羅とくゆらかし

舞玉玉きぬの袖の心結結愛

夜の夜をもつほら包にかたあきて

ゆり枕のみしえんあつ言

六波羅にさハきけること（大）大事

真葛が原の風あたる家

何猫 才十
 覆面ハ紅花の春（候ナラシ） 節季の
 もちつく聲のにきハへる家
 門は藪暮を相圖に蚊の出で
 寐ぬる在も人近きもの
 雪山も南おもてハ隙かち
 野へに摘菜よ糝チカキ用意
 白馬の影も七目の月毛とや
 明はとくくおもふかん旅

三九才

蝶を思ふ計の花の雨
 日にし落すや如 飛夕からす
 三三才

10 20 新宿 甲州産特製

うつろふ物は霜の百菊
 色欠えて心ちよけなる松栢粒
 やぶれ障子をあもふ古寺
 風寒て頓てはりある志笑郡
 恨にしかむハいつあふ之斬
 思女中ハ初神一鳴もよもさけし
 肌のみもりやあすめる小文
 尻目にもかくる心の花の袖
 息を休むる風見の上り場
 月と共しある汗をもおもほえす
 三九ウ

う仕合をうるよしもかふ市の民
 にはがと多し舞臺昌の風
 竹とうへ柳茂う世紀籠して
 かけもみたる、水の音久
 夕涼之先達物は菘菘也
 かたいけ泣のあみたの着衆
 一さしの舞の袖ふりいとをしや
 こ、ろよはくもかけねさおつき
 いねら(うらら)といふ遠かけの関の前
 おどろく事ハながすれの口詩

今日月の名姝惜きや十三夜

虚空^{コウウ}花より下向する友

空のあしめぬらん時雨の山

暮らそ淋し川舟の上

さかやきをさる共あそぬ床の前

狂^{ヒハツ}なりこそすねく小座敷

琴の音は壁草の根よ^よ下よ

追風にほふたけれめの女

玉きぬのさいく伊達の下子^下染

之んにひかれて近き部を住

し四十才

牛の子ハ三さいよりも鼻をさし

大にはとくも賤かこころ得

硯ある林の曙食をいろ^そき

午水をつかひ髪をあけハヤ

一向に歩まへをいつさかしづきて

あはるくや四座の能くみ

小いわしの網子調ふる淺舟

かもめ尻うく初しほの浪

照しぬる平砂も月も白淡か

社もりつゝたふるせん茶

花さかり木陰の外も札立て

閑帳すれの石やまの春

三 殺生をかついやめかし勢多親レビ

いのちいつまで長橋あたり

哥や形見流石名を得し其身とて

かくるゝ草下のつましもわ

芦をうる葉面やすいた水

あむ出つゝ稔まくとき

水層ミ去沈果しハ夢かいの

舟よし捨し欠の渡

し四十一

10
20
新宿 甲州屋特製

旅衣日も暮ぬれハ通うす

月ハ清きに葎のわんづ

殊勝キりい秋あらしニ玉門

西勢も不断の音とたく寺

朝まだきしひやめく井戸ハあかの為

日より見かけるときあらし衣

三 三 うつりゆく春過夏の家ま子

かごと恥りしさがふの橋

今日こそハ結ひめとくれひた地帯

あお長枕いと不審なり

し四十一

夜なすてかよひ給はぬ御身いかに

月しろしめせ君は御妻

白露の色に鐵唇すさや輪子

葉の社をもろろしの舟

鉄炮の玉を軍の命にて

難所の多くある園かま

ふるひぬるゆめの跡はか歯く

盡る一期のさへを悲しす

花の程に鳥の餌さしにかいさし

のとけき館の末の領内

10
20

新宿
甲州屋
特製

名打かす志佐義信まを見送りて

接待による英人のあはれ

無か帰る盆を思ひの露路詞

いつくもあなし足そ萩の花

風景ハサハレ小共秋の月

耳すませとわさるひくらし

こめやとい表の産おしのをかれて

下あさねまて急をいつくしや

ゆたかなる親の小娘をたて上

召れえおの内位めでた

木の道をたくむハ曲カ金を子を由子に

益く米をはかるとるかせ

が、めくや殿も家中北年の暮

ぬふてふ針のりと共あせ袖

う共君のほをならうつ、房をたれ

聲母位去の田哥サ小哥

時鳥遠里をのれなせきめん

日待に長し短夜の空

大非ねさの経すじ返し行て

たのもし人をつれし水初瀬

十四才

名木の花のそれくあないうれし
るらとひえほあか非母サつる

う
 耳みみのこゝろもてなしぬるやうのこゝろ
 目めによろこふハは秋あきのこゝろによ
 いとをいしこひ共すあしの飾の重
 あたる小春こはるのまの日張はわ
 始はまるるの的場の廣かれわ
 氏うぢ人ひとまつる神かみの威勢せき
 朝あさほらけけ橋はしつめで髪結むすん
 拂はらふや旅りの打けけの西路じ
 夕ゆふ入いをまとあもふ山やま越こへに
 志こころ望ぞの月足あの友たちさらは

何曆追加

日を逐おて上何いく梅櫻もも
 草くさ上の花はなの野遊あそびの客きやく
 鶯うすの音をなつかしいを念句くして
 立た春はるの空疎そ重し
 削く成なり屋や形かたちのおげの月つきかんあ
 西にし行ゆまの舟ふねの廣橋はしつますい

維舟

城もこの景しうるゝ多し
 田には音頭をとくくの哥
 もはや月雨晴天の郭公
 夢すす後のたはこ何あく
 別にハほそき心の暇ニハ
 忘れたえのひんの一あさ
 舟へも銭を勧進にいり
 上あきを須戸寺院し花の陰
 春の山のとて小雨たうく

し四三ウ

年嵩も散花園も余波あし
 醉をすゝあるあちこちの風
 氷ぬる肌もやうやくあたゝかに
 浪間の真を孝行のため
 朔日や久しきせより祝あらん
 ちつましと知神子とらんあか
 たの之にハ墓をも結ぶ常陸帯
 こはくの玉を巾着の口
 金銀ハ身を助くる巾着あうす
 上馬山荷駄も巾につれたつ

し四三ウ

